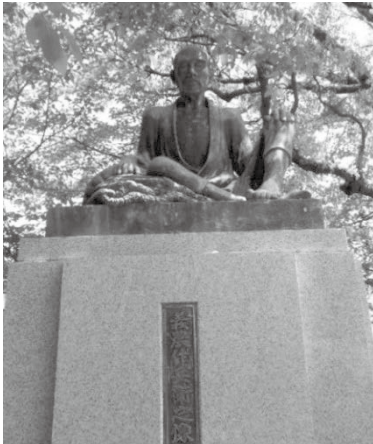


# 義農作兵衛

松前町



義農作兵衛の像

作兵衛は、貞享5（1688）年、松山藩筒井村（現松前町筒井）の貧しい農家に生まれた。子どものころから働き者で朝早くから夜遅くまで働いた。作兵衛は、「どんなやせた土地でも手入れをすれば、必ずよい田畑となって、多くの米を収穫することができるはずだ」と、農作業に精を出したので、村人からは、百姓の手本とまで言われるようになった。

しかし、享保17（1732）年、松山藩は大変な飢饉に見まわれた。5月から長雨が続き洪水が起こったことに加えて、6月になるとウンカという害虫が大発生し、米の収穫はほとんどなかった。農民たちは、わずかに蓄えていた雑穀などを食べて飢えをしのいでいたが、それさえもなくなると、飢え死にする者が多数出てきた。作兵衛方では、前年、病気で妻が、そして、この飢饉で父親、息子も相次いで亡くなった。作兵衛は衰弱するなかで、畑を耕そうとするが、遂に倒れてしまう。家に運ばれ、寝込んでいる作兵衛の枕元に麦俵があることに気付いた近所の人「命には代えられないので、その麦種を食べてはどうか」と勧めたが、作兵衛は、「農は、国の基で、種子は農の本です。一粒の種子が来年には、百粒にも千粒にもなります。わずかの日、生きる自分が食してしまっ、どうして来年の種子ができるのでしょうか。自分の身を犠牲にして多くの人を救うことができれば、私は本望です」と述べ、麦種一粒を食することなく亡くなってしまった。それから間もなく娘も亡くなり、一家全員が亡くなった。

村人たちは、作兵衛の百姓としての心構えに心を打たれ、作兵衛が残した麦種を一粒一粒大切にまいた。また、この話を聞いた松山藩は、年貢を軽くしたり、免除したりした。

作兵衛が亡くなった後、45年を経た安永6（1777）年、松山藩主松平定静<sup>さだきよ</sup>は、彼の功績を後世に伝えるため碑を建立、明治14（1881）年には義農神社が建立された。「農」という自分の生業に誠実であろうとした作兵衛は、麦種を遺すことで、多くの人々の命を救った。作兵衛の尊い思いは、「義農精神」として今日も脈々と受け継がれている。「天を敬する者は天より恵まる／地に親しむ者は地より与えられる／人を愛する者は人に報ひらる」と記された作兵衛の墓標がある義農神社では、毎年4月23日に義農祭が行われるなど、地域の人々に親しまれている。また、松前小学校では、「義農精神」が太鼓の心として継承されている。

## 〔参考資料〕

松前町誌編集委員会 『松前町誌』

松前町ホームページ (<http://www.town.masaki.ehime.jp/soshiki/17/ginou.html>)

愛媛県教育会 『愛媛子どものための伝記 第四巻 義農作兵衛』

地域活性化センター 『伝えたいふるさとの百話』